

大人計画公演「親切伝」シリーズ第2弾 マイアミにかかる月

1989年4月13日〜16日 大塚ジエルホール

キャスト

片葉みはる……………カスミ/ウヤムヤ・デ・エーガネ
松尾スズキ……………ダントン/アルジャーノン
大塚恵利子……………カツエ/異常に老けたアナウンサー
盛根さと子……………トクコ
温水洋一……………ローレック/タクマ
田之中秀二……………スタインベック
常盤千春……………ピシヨット
薄上邦子……………ラーメン屋

スタッフ

作・演出……………松尾スズキ
照明……………佐藤啓
音響……………長谷川周平
音楽……………外園浩嗣
衣裳……………大塚恵利子
デザイン……………アリババ計画
道具……………温水洋一
制作……………出口容子
音響協力……………大人計画事務所
衣裳協力……………落合敏之
……………林佐智子

あとがき

これには「親切伝」シリーズ第二弾ってサブタイトルが入っているんですがサブタイトルつけときゃ何かひっかかるだろうってのがあって。気になるでしょ(笑)。あ、こういうのがあったんだって。この前の「手塚治虫の生涯」(88年)が「親切伝」序説で、この後の「嫌な子供」(89年)が「親切伝」の完結編。三つとも同じような手法で書いたっていうことなんですけど。

その頃カート・ヴォネガットの「愛は負けても親切は勝つ」って言葉にすごくシンパシーを覚えていて、彼が本の中でちょっと言っていたことなんだけど、すごくいい言葉だと思って。愛みたいなのっていうのは動物にもある気がするんですよ。何かがないと生きていけないっていうのは、桜餅を愛しているっていうのと同じだと感じていいと思っんです。それと同じように、動物も何かがないと生きていけないっていう面においては、愛という言葉を使いたいと思っただけで、でも、親切という言葉は動物にはきつとないだろう、親切は人間の特権でね。だから愛は負けても親切は勝つってことだと思っんですよ。まあ、そういう気持ちに裏付けされたシリーズ(笑)。そういう漠然として気持ちを、ものすごく長い複雑な物語によって表現していくっていう。

だから最初に物語ありきですよ、当時は。この人たちがわらわらと集まってできた劇団ですから、役者にほとんど期待はしてませんでした(笑)。その頃の僕の演出方法は、下手な役者をいかに上手く見せるかってことにかかってたわけです。下手な役者は下手な役者なりにいっぱい舞台に出す。役者を育てるのって、必要なんですよね。追いつめられた時にやっぱり人は、本領を発揮するんですよ。だから訓練訓練って言うてないで、実際に舞台にポンってほいたら追いつめてみるって思ってるんです。そういう時にグッとこのびる。ただ、そのときに下手なところを商売としてうまく見せられるか見せられないかってところにしかかかってると思っいます。必要だからって、いつか上手くなりますからって見せ方では、ダメだと思っんですよね。こいつの下手さもおかしいでしょ？っていう見せ方でやっていかないと、役者は育つかもしれないけど、商売にはならない。お客さんがお金を払って来てるわけだから。

僕の演出は、とにかく現場主義だったのね。現場にあるもので最大限の効果을上げようっていうのがポリシーだから。それは今でもそうなんです。とにかくその時の現場で追いつめられて追いつめられて——脚本もそうですよね、その時考えていることをすべて出して、こう。その時ある予算の中で最大限の効果をあげよう。そのことしか考えてなかったです。とにかく目先のことしか考えてなかった(笑)。それが誠実なんじゃないかなと思ってたんですよ。